

を漂ふてかすかに道を明るうする。何時かのジャズの音が嵐の底から聞えて来る。ホテル街へ出ると女給風の女が一人前を歩いて居る。蛇ノ目傘が貴かにネオンに映る。雨は横殴りに物凄い程である。鐵筋作りの十数の不夜城も物音一つしないで、雨中に建つて居るのが實に物寂しい。こんな夜は客が無いらしい。星降る夜の盛況に對して何と云ふ悲惨さだろう。風雨の厳しさはホテルへの暴客の如く又家の塵埃を洗濯に來た掃除人夫の如くにも見える。私はネオンの灯を浴びつづ足に降りかゝる雨の冷たい觸感を享けて其處を通りぬけ大通りに出た。自動車のヘッドライトが濡れたアスハルトに映して音もなく過ぎて行く。店のガラス窓が暗く光る。街燈や家を漏るる灯がアスハルトに寂しい影を落して居る。ポプラの街路樹が颯々揺れる。激しかった風雨は小止みとなつた。電車が響々と重たさうにしきんで通ると雨の夜は一入靜かになる。

私は妹を寝かす爲に子守唄を唱つた。妹は聲一つ出さずに背に居て寝さうもなかつたがやがて寝入る氣配がした。子守唄を唱つて居る内に私も何か寂寥な氣持になつて、自分も幼ない時母の腕に抱かれて子守唄を聞いた事もあるんだと思つた。歌の中には父母の無量の愛と、苦勞を忍んだ父母の血が解け込んで居るのである。懐しい歌だ。人として子守唄に心打たれるは當然である。私も今は歸省して父母の慈愛深き腕に懷かれては居るが、初めて父母と訣別して他郷に行つた時の氣持ばそして月光皎々とした夜異郷に開いた子守唄はどんなだつたらう。私は

自分の歌つた歌が深く胸に食ひ込んで來て父母の鴻恩に感泣し噎んだ。

餘り遅くなると父母が心配すると思つて、歸途についた時は小降りになつて細い絹糸の雨が晴れかかつた中空から落ちて居た。妹の寢息が靜かに聞えて来る、可愛いものだ。

暗い家で扉の上にサクロの花が灯にほんのりと顔を浮べて揺れて居る。「ジジ」と眞暗な闇夜の何處かからか蟬の聲が聞えて来る。自分の泥道を歩く音が妙に寂しくビシヤ／＼と闇に響く……(3)

——九月十日——

沼を想ふ記

小林 是 淳

その沼には童子の夢が潜んでゐた。青い沼の水は時々白雲を沈めて深々と澄すで見えた。雨が滲みついた薄黒い切株にはヌルヌルと苔が生えて、山藤の蔓には青いトンボが靜かに止つてゐたりした。私達は放課を待つては沼の畔に集つた。

蜻蛉や蛙を追ひ廻して、ひねもすを暴れ暮す楽しさ……だが小さい暴君の一團は毎日のやうに仲間割れがしてそして一方の大將が忠雄君である時、他の一方は決つて僕で、小さいなりに殺氣立つた喧嘩隊は沼をはさんで對峙した。

弱蟲！ バカヤロ……こんな應酬にいゝ加減倦怠を覺える頃

身延の鐘に想ふ

黒澤龍正

沼の面は煙のやうに澱んで来て暴君達は日暮れに氣付く。もうその頃は青い融蜂の影も消えて、足許でなびくほゝけたツバナの穂が白々と夕闇の底に浮いてゐるだけ……。

早くかへろ、蝮蛇の眼が光るよ。

誰かが唄ふやうに呟鳴ると、みんな一聲にワイ／＼と逃げ出す程夕暮の沼は無氣味で醜怪で子供の私達には恐しかった。然し私達は同志を集めては夕暮も忘れて沼畔に悦樂の毎日を送つたのだつた。

高等小學校へ入學すると家が轉居して新しいグループが私の周圍をとりまき、彼等との交渉が遠くなると、私の記憶からも何時しか薄れ去つた沼や人だつた。

そして幾年かの或る晩夏、河原へつづく薄暮の小路で私は陸しさうに自轉車で行く二人の中學生に遭遇した。軽い驚きに聊か狼狽してしまつたのである。見違へる程スマートに成人して男を上げた一人は忠雄君だつた。彼は私を忘れたのかベタルを踏んで去つてしまつた、が私はふと彼と對峙したツバナ咲く青い沼を想起した。晩夏の空に湧く入道雲を見て私は沼を畫いた。久しく忘れられた沼、過去の童子の夢を包んだ晩夏の沼。暴君の顔。無性に沼を想ふ心は暴君彼等への憧れかも知れない。春秋の隔りは私と暴君達とを引き離してしまつたけれど、沼を想ふ幼時の追憶は不思議に離れた暴君を懐しい雰圍氣の中に溶け込ませてくれる。私は沼を想ふ。そして幼時の追憶にひたる。

(一)

吾々は笈を延嶽に背負つて已來常に永遠に鳴り響く梵鐘の音を聴く。宗祖棲神の靈山をして、より以上に靈格たらしめるものはあの梵鐘の音である。恰度それは祖師弘導の正法が末法濁惡の世相を打破せずんば鳴り止まぬが如く鳴り渡るのである。靈山身延に居住する者は勿論日々に參詣する老若男女をして、より以上に法悦慈愛の泉を涌かせしめ、澆季混濁の世に處する力強き羅針を與へしめんとして鳴り渡るのである。

大自然の活動が開始されんとして東天香かに白み鷓鴣黎明を告げんとする時、清冽な晨の大氣を打破つて韻々と鳴り響く鐘の音、吾等は之によりて覺醒し鼓撫されて自己特有の戰場に向つて勇ましい活動を開始するのである。若しも吾々が一朝でもあの朝空に響く鐘の音を耳にしなかつたなら、如何なる寂漠さと空虚さを痛感する事だらうか。

野に出て働く農夫の背にサン／＼と慈愛の光りを漉いだ太陽も、秋空に眞紅なる光線を残して西山に没すると早や物寂しい木枯に似た夕風が山野を馳け廻る。秋！澄透つた秋の冷瓊さを増した夜空に望郷の懐を物かなしい雁の鳴く音に托した時、弧を畫いて山野にひびき渡る靈境の梵鐘、其處には拘めども盡きざる詩の泉もコン／＼と沸いて來るのである。